第Ⅱ章　調査概要

1　調査地域

今回報告する調査地域は，平城宮朱雀門内の北方約500mから展開する「第１次大極殿地域」である。この地域は水田やその畦畔の地割りによって，東西約180m，南北約300mの宮殿区画の存在が推測されていた。小字名には「大宮」・「東大宮」の地名がある。こうした地名と踏査によって，関野貞は「内裏（中宮）」に比定し，その南方に「南苑」を想定したのである[1]。関野貞らの考証によって，大正年間に史跡として指定されたのは，壬生門の南から北へならぶ朝堂院，大極殿，内裏を中心とする南北約820m，東西約620mの範囲であった。1955年に当研究所が本格的な発掘調査を開始し，遺構の配置状況が次第にあきらかになる。1962年段階においては，朱雀門内にも壬生門内とほぼ同規模の宮殿区画の存在が推測された。この結果，朱雀門内の遺構を和銅創建時の第１次朝堂院・第１次大極殿・第１次内裏にあて，壬生門内の遺構を聖武朝の平城還都以後の第２次朝堂院・第２次大極殿・第２次内裏に比定したのである[2]。

従来の見解

ところが，第１次大極殿地域の発掘調査が進行する過程で，この地域には東方の第２次大極殿・第２次内裏地域とは様相がことなることが次第にあきらかになり，和銅創建時には「内裏」がこの地に存在しないとかんがえられる状況がでてきた。以下の章で詳述するように，この報告では和銅創建時の大極殿をこの地に想定し，「第１次大極殿地域」の呼称を用いる。

地形的には北方の約1/3が奈良山丘陵の末端の台地（標高73m）に位置し，のこりの2/3は沖積

地　　形

（調査次数）	（調査区・地区名）	（調査期間）	（発掘面積）
27次	6ABD—D, 6ABQ—B, 6ABE—K, 6ABR—P	1965, 7, 2～66, 1,17	66.9a
41次	6ABE—M·P, 6ABR—Q, 6ABS—E	1967, 7, 1～67,11,23	42.0
69次	6ABP—A·B·D	1970, 8, 3～70,11,21	34.2
72次	6ABP—F·G, 6ABQ—C	1971, 4,13～71, 8,11	39.2
75次	6ABQ—C·D, 6ABR—G	1972, 4, 1～72, 6,20	40.3
77次	6ABR—H·G·J	1973, 1,13～73, 4,23	41.2
81次(東)	6ABO—E	1973, 4,12～73, 7,18	9.9
81次(西)	6ABO—P	1974, 1, 7～74, 2,16	8.5
81次(中)	6ABO—L	1974, 6,12～74, 7,23	6.8
87次(北)	6ABP—A, 6ABC—U	1975, 7, 2～75,10, 2	34.0
87次(南)	6ABP—B, 6ABC—V	1976, 1, 6～76, 3,25	28.3
117次	6ABD—C, 6ABQ—A	1979, 9,19～80, 1,12	32.0
			(383.3)

Tab. 1　調査期間と発掘面積

1）関野貞『平城京及大内裏考』（東京帝国大学紀要工科３）1907

2）『平城宮報告Ⅱ』p. 111

地の平野部（南限で標高68.5m）にある。第1次大極殿地域の発掘調査は，1958年に一条通り南側の2個所において，行なったことがある[1]。しかし，それは小規模な発掘にとどまり，本格的な発掘調査は1965年からはじまった。その後1979年まで断続的に12回の調査を進め，383.3aの範囲にわたって土砂を除き，この地域の東半部の遺構をほぼすべて検出しえた。未調査地として，北限の一条通り道路敷と南限の一部がのこる。前者については重要な地域であるが，ここ当分の間は発掘の予測がたたない。後者の約1,600m² の区域については周囲の遺構状況から類推することが可能である。今回の調査地域を当研究所の遺構標示記号によってあらわすと，

調査面積

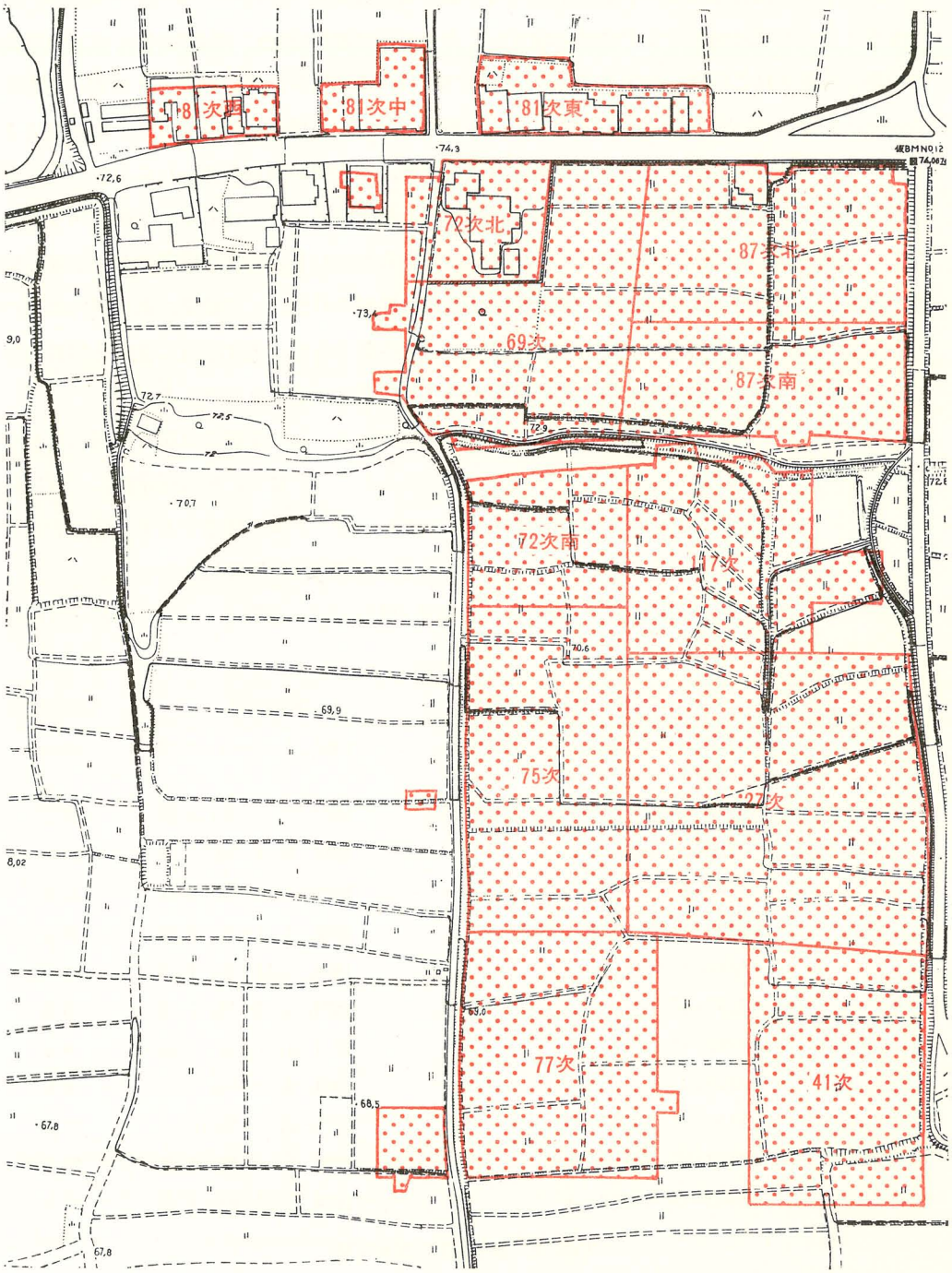

fig. 1　調査地域

1）『平城宮報告Ⅱ』p. 36

6ABE区K・M・P地区，6ABS区E地区，6ABR区G・H・J・P・Q地区，6ABD区C・D地区，6ABQ区A・B・C・D地区，6ABC区U・V地区，6ABP区A・B・D・F・G地区，6ABO区E・L・P地区におよぶ（Tab. 1, fig. 1）。

2　調査経過

15年の間に12回にわけて行なった発掘調査の成果は，発掘面積を拡大するたびに次第に詳しさをましていった。初期には，遺構がますにしたがって遺構の解釈にも変化を生じた。しかし後半になってからは大まかな変遷の構図を組立てられるようになった。ここでは調査後まもなく作成した調査終了報告や調査概報にしたがって，その間の事情をのべることにする。したがって遺構の名称などについては，つとめて発掘直後のものを用いた。

A　第27次調査

この調査の目的は，第1次内裏の存在を遺構のうえで確認することにあった。調査地として，土塁状の高まりをもつ畦畔が北から南下し，西へ鉤の手に曲る遺構の保存が良好とおもわれる地域をえらんだ。検出した遺構はA・B・B′・C期の4期に分類された[1)]（fig. 2）。　**最初の調査**

A期　発掘区中央を南北に貫通する築地 SA3800 があり，築地の西側には 14m の間隔をおいて，東西にのびる2条の塀 SA3805・SA3818 とがある（ともにのち足場に変更された）。およそ SA3805 の位置で築地の西から東へ流れる東西溝 SD3775 もこの時期にぞくし，発掘区東限の大きな南北溝SD3715に注ぐ。また SD3775の北側に平行する東西塀 SA3780もA期にあてた。

B期　発掘区中央に南北廊 SC3777 があるこの廊は基壇（幅6m）の築成に一部旧築地を利用して東へ拡張したもので，中心に柱間 4.6m の南北柱列をおき，屋根と塗壁とをそなえたものに想定した(SC 3777はのち南北塀に変更)。塗壁が強調されたのは，SC3777 の東側から多くの壁土(のち築地版築土に推定)の断片が検出されたからである。そして西側にある石敷南北溝SD3790（下層）と東側の南北溝 SD3765 もこの時期にぞくするものとした。　**南北廊**

B′期　B期の部分的改修とかんがえ，石敷南北溝 SD3790(上層)から発して東方の南北溝 SD3715(上層)に注ぐ木樋暗渠 SD3770が主な遺構であり，南北廊SC3777の東側で南北にのびる5条の塀 SA3795を幄舎（仮設建物）の柱列とかんがえた。B期とつぎのC期との間に介在する遺構として，東西塀SA3818の南側に掘り込まれた土壙SK3784，発掘区の東半分全域をおおう礫敷，あるいは轍 SX3785を想定するであった。

C期　南北廊SC3777にかえて，発掘区中央で鉤の手に曲る東面築地SA3800・SA3810がつくられ，その東南方向を東西塀 SA3740 がとりかこむことになる。　**東面築地**

時期については，A期＝第1次内裏の時期(和銅創建)，B期＝第2次内裏の時期(聖武朝以降)，C期＝平城上皇の年代にあてた。遺構の認識と時期区分は，後に少なからず訂正をうける。だが東面と南面の築地に想定してきた土塁状の地物SA3800・SA3810が新しく，それよりも古い築地回廊が第1次内裏と朝堂院の東面を画したことを確認したことは予期せぬ成果であった。

1）石井則孝・三輪嘉六「昭和40年度平城宮発掘調査概報」『年報1966』p. 34

B　第41次調査

第41次の調査地は第27次調査地の南側にあり，第１次大極殿回廊と第１次朝堂院築地との接合点をふくむ地域に想定されてきた。この調査でも遺構はA・B・C期にわけられたが，その年代は第27次調査とはことなっている。すなわちA期＝和銅創建時，B期＝霊亀元年以後，C期＝神護景雲３年以前である[1)](fig. 3)。

A期　東面築地回廊SC5500，南面築地回廊SC5600がある。SC5500の基壇幅は11.6mで，部分的にのこった礎石据付痕跡によって桁行15尺，梁間24尺，梁間中央に築地を想定し，第27次調査地から南下する石敷南北溝SD3790を西雨落溝にあてた。SD3790は暗渠SD5561で南面築地回廊SC5600を横断したのち，方向を東にとり東西暗渠SD5555となって，南北溝SD3765に注ぐ。SD3765は第27次調査ではB期としたが，今回の調査では和銅の紀年木簡が出土し，遺構の重複関係からも，和銅創建時に遡ることが判明した。また，東面築地回廊SC5500の基壇にある６条の南北塀SA3795は，幄舎ではなく回廊構築用の足場としてこの時期においた。

東面築地回廊

B期　東・南面の築地回廊はA期の状態で存続しており，曲折点に朝堂院の東面を画する塀SA5551，SA5550がつけくわえられた。このさい，南北溝SD3765は東へ移動し，新たに南北溝SD3715を掘削している。回廊内からの排水路も北へ移動し，木樋SD5560と開渠SD5558でSD3715に導く。SD3715の開削時に破壊された土壙から霊亀元年(716)の紀年木簡が出土したことによって，この地域における改作年代の１点が定った。なお，第27次調査では南北廊の中央柱とかんがえたSA3777は回廊修理に関する遺構としてB期に比定した。

南北幹線排水路の移動

C期　朝堂院の塀SA5551，SA5550を築地に改修し，回廊内からの暗渠排水路も２回にわたってつけかえる(SD5562, SD5563, SD5564)。暗渠とSD3715との合流点付近を中心にして少なからぬ木簡を発見し，そのうちには神護景雲３年(767)の紀年木簡があった。その後，平安時代にはこの付近に顕著な遺構がなく，南北溝SD5530のみが細々とのこった。

このたびの調査によって，和銅創建時にはこの地域が築地回廊で囲まれていたことを確認し，構造の一端があきらかになった。一方，すでに調査が終っている一条通り北側，6ABO区を東西によこぎる礫敷の東西溝SD130が，第１次内裏の北面をとりかこむ築地回廊の南雨落溝にあたり，その東端付近にある建物としたSB269の柱穴が，改修時の南北塀SA3777の延長線上にあたることが再確認された。こうしたことから，和銅創建時の内裏と大極殿をかこむ築地回廊が東西180m（600尺），南北317m（1060尺）であったことが確定した。

範囲の確定

C　第69次調査

第41次調査後３年をへてから，いよいよ第１次内裏の中枢部にメスをいれることになった。一条通り沿いの民家移転が完了する時期にあったが，中心に位置する旧八木邸にはまだ廃材や樹木がのこり，発掘しうる状況でなかった。そのことから，旧八木邸を南東方からかこむ形で，台地上に発掘区を設定した。検出遺構はA～Dの４期に区分しえたが，ここでは第41次調査で有効な働きを示した紀年木簡などの出土品はなく，A期＝和銅創建時，B期＝上限は天平

1）阿部義平「平城宮跡発掘調査」(『年報1968』奈良国立文化財研究所要項) p. 37

末年までさかのぼらず下限は奈良時代末期頃，C期＝奈良時代末期から平安時代，D期＝平安時代という莫然とした年代観をよぎなくされた[1)](fig.4)。

A期　内裏・大極殿の築地回廊内を南北に3等分した最北の一郭(台地)の前面に化粧した塼積擁壁SX6600がある。擁壁の高さは1.5〜1.7mで，その前面は礫敷の広場となる。朱雀門中軸線の延長線上に擁壁を登る掘立柱の階段SX6601がある。台上は削平され顕著な遺構はなく，木階を登ったところに7間×2間の東西棟掘立柱建物SB6605があるにすぎない。しかし，これを正殿とするわけにいかない。

塼積擁壁

B期　塼積擁壁を南に拡張し，台上に10尺方眼で地割りした計画的な殿舎が軒をつらねる。すなわち正殿SB6610は中軸線上にあり，9間×9間の総柱建物，かつて宮内では例をみない大規模な建物となる。その東方に7棟の東西棟掘立柱建物が整然とならぶ。一方，一条通りぞいに礎石据付痕跡を発見し，この時期の北面築地回廊の南側柱列SC6670に想定するとともに，それは東方の第2次内裏北面築地回廊とほぼそろっていることが判明した。

総柱建物

C期　中軸線上の9間×5間の四面に廂がつく東西棟掘立柱建物SB6620を正殿とし，その東南方に南北棟の脇殿SB6622をおき，東北方に東西棟の後方の脇殿SB6621をおく。それらの建物は共通して廂を広くとり，溝や塀でかこまれている。

D期　正殿と脇殿が建替えられ，小規模なSB6642とSB6614がたてられたと想定した。

このたびの調査によって，中心部の状況があきらかになったのであるが，A期の塼積擁壁といい，B期の総柱建物といい，まったく予期しなかった遺構が出現したのである。この地域が第1次内裏にあたるという先入観によって，A期の瓦出土量が少ないことから台上の建物が瓦葺ではなく内裏のように桧皮葺であったろうとか，B期の建物配置と第2次内裏後宮建物配置と類似しているのではないかなどとかんがえた。B期の北面築地回廊位置が第2次内裏のそれとほぼ同一線上にあり，A期の築地回廊が縮少した結果であるとしたことも新しい知見であった。一方，正殿と脇殿をコ字形に配置する第2次内裏的な建物配置は，C期においてのみ明確にみとめられた。

内裏の建物配置と照合

D　第72次調査

第72次調査は，第69次調査の掘残し部分ともいえる台上の6ABP—F・G地区と，台下の6ABQ—C地区で行なった。検出遺構の時期区分は，おおむね第69次調査と矛盾しない[2)](fig.4)。

A期　発掘区中央北寄りに位置する特異な溝状遺構SD7165，SD7167がある。それは3個所で溝を北へ屈曲させ，凸字状に北へ突出している。中央の突出部は中軸線上にあり，東西の突出部は中軸からそれぞれ15mはなれている。この溝は浅くて水を流した痕跡がなく，凝灰岩の破片が散在していることから，基壇および階段の地覆石の抜取痕跡にかんがえられた。のこりは悪いが同様の遺構が南29mの地点で東西にのびている(SD7167)ことから，徹底的に破壊された大型建物(SB7200)の存在を推定したが，異論もありただちに断定できないという保留がつけくわえられた。

地覆石抜取痕跡

B期　第69次調査で検出した正殿SB6610・SB6611に北接してSB7150(9間×5間)があり，その後方にSB7150と桁行をそろえた2棟の建物SB7151，SB7152が20尺の間隔をおいてならぶ。

1）横田拓実・石松好雄・田辺征夫「平城宮跡・飛鳥藤原宮跡発掘調査」『年報1971』p. 28

2）阿部義平・甲斐忠彦「平城宮跡飛鳥藤原宮跡の発掘調査」『年報1972』p. 26

これらの建物は第69次調査で検出した東方の殿舎群とも柱通りをそろえ，計画的に配置されている。また第69次調査で検出した北面築地回廊 SC6670 の南側柱列の遺構も発見された。

C期　第69次調査で検出した正殿 SB6620 の後方に中庭をおき，一まわり小さな後殿 SB7170 をおく。発掘時には中庭の東西が塀によって仕切られるものと判断したが，足場の検討によって身舎を礎石とする南北棟建物 SB7173・SB7172 であることがわかった。SB7170 には貯水設備のような遺構をそなえ，内裏的な居住空間の要素をとどめている。建物配置や柱間寸法を広狭多様に使いわけ，塀などによって敷地内を小さく区画するなどB期の遺構との間に大きな相違のあることが指摘された。

足場からの建物復原

6ABQ―C地区の遺構は，台上の遺構にくらべて少ない。A期には南北に発掘区を貫通する素掘りの南北溝SD7142とその東方の井戸 SE7145があるほかは，一面の礫敷広場である。B・C期も広場であることにかわりはないが，B期には中軸線に東西に長い桁行6間，梁間1間の掘立柱遺構 SX7141がある。C期には台上から導く溝SD7133と発掘区中央でL字状に曲る素掘溝SD7131・SD7132とがある。それらのほか時期不明の遺構として建物 SB7134・SB7140・東西塀 SA7130 があった。一方，発掘区北限に凝灰岩片が散布するところがあり，構内道路を設けている付近にB・C期の擁壁があったのではないかとかんがえられた。

今回の調査によって，台上には殿舎が林立し，その前面が一面の礫敷広場になることが判明し，第1次内裏地域の具体的な姿を適確に把握できるようになった。とくにB期の中心建物の上部構造については，類例がなく苦慮するところとなる。ただし，唐長安大明宮の麟徳殿の柱配置ときわめて類似していることが指摘され，百柱の間という愛称を与えた。検出遺構を史料にあらわれるどの宮殿に比定するかという点になると，以後多くのことなった意見が乱立することになるが，この段階ではその候補宮殿として中宮，中宮院，内裏があげられた。

麟徳殿との比較

E　第75次調査

このたびの調査地としては，第72次南調査地から南方に展開して，第1次内裏南面築地 SA 3810をふくむ。第2次内裏との比較から，内裏正殿相当の遺構の存在を予想した。第75次調査ではA期＝和銅初年から天平勝宝5年まで，B期＝天平勝宝末年から宝亀末年まで，C期＝延暦年間から弘仁年間[1]までとかんがえた(fig. 5)。

A期　礫敷広場である。発掘区東辺に2棟の南北棟建物 SB7780・SB7790が南北にならび，第72次調査地で検出した南北溝 SD7142 が発掘区を貫通する。他方第27次調査で検出した2条の塀SA3805・SA3818が発掘区を東西に横断する。発掘区の南西隅に南北溝 SD7760 がある。

南　　門

B期　発掘区北半を土盛りし，東西にのびる築地 SA3810Aを築き，その中軸線上に南門SB 7750A を開く。門の遺構としては凝灰岩地覆石の抜取痕跡が唯一のものであった。

C期　南門と築地を改修するが (SB7750B・SA3810B)，このさい門を掘立柱建物(5間×2間)に変更している。また，発掘区南限には第27次調査地とつながる東西塀 SA3740 があった。

このたびの調査の副産物として，平城宮造営以前の遺構を検出している。発掘区北西隅に方墳SX7800があり，それを削平したのち，南北溝 SD7787が通っている。この溝は朱雀門地区の

1）吉田恵二・岡本東三「平城宮跡とその周辺の発掘調査」『年報1973』p. 19

発掘調査以来あきらかになっている下ツ道の東側溝にあたるもので，古墳の年代から下ツ道が6世紀以降につけられていることが判明した。　**下ツ道**

この地域には当初予測した殿舎の存在はみとめられず，B期に築地で仕切られるほかは，一面の広場であったことがあきらかになった。

F　第77次調査

第77次調査地は，第1次大極殿想定地と南面の築地回廊SD5600をふくむ地域である。平城宮造営以前の遺構として下ツ道東側溝SD7788や小さな掘立柱建物があり，造営時の整地土の下からは木材の削屑などが多量に出土した[1](fig.6)。

A期　奈良時代の時期区分は第75次と同じだが，A期が3小期に細分されることになった。A_1期には中軸線上に南門SB7801をつくり，その両翼に築地回廊SC5600・SC7820がとりつく。　**南門**
ともに丁寧な掘込地業を行ない，盲暗渠をともなう。SC5600には礎石据付の根石が比較的よくのこっており，柱間寸法がわかった。A_2期は基本的にはA_1期の建物を踏襲するが，築地回廊SC5600に，楼風建物SB7802を増築している。SB7802は5間×3間の総柱建物で，四周を掘立柱　**楼風建物**
とし，内部の柱には礎石を据えたことをしめす根石がある。掘立柱掘形は平城宮でももっとも大きいものの一つで，発掘当初は井戸の掘形に誤認するほどであった。1穴の柱掘形に柱根がのこり，巨大な柱がたてられていることがわかるとともに，多くの柱抜取痕跡から木簡などの遺物が出土し，紀年木簡からこの建物の廃絶が天平勝宝5年(752)以降であることがわかった。築地回廊の北側には素掘りの東西溝SD5590が貫通する。それは東面築地回廊西側にそって南へ折れ，第41次調査でC期に比定した木樋暗渠SD5562・SD5563につながって，築地回廊外にぬける。A_3期には門基壇が少し縮少する程度の改作がなされ，基本的にはA_2期と同じ建物が存続する。基壇周辺の雨落溝や礫敷に改修がみとめられる。また，東西溝SD5590を拡張して，SB7801の階段脇から北上する南北溝SD7760がつけられた。これは北方の殿舎に至る参道の側溝とかんがえられる。

B期　南面築地回廊はなく，この地域は一面の広場となり，建物などの遺構はない。しかしながら，発掘区全域に礫敷がみとめられた。

C期　身舎を礎石とし，側柱を掘立柱とする7間×4間の東西棟建物SB7803が中軸線上にたち，その後方に小さな柱穴の東西塀SA7815が発掘区を横断している。この地域の中心的な建物であるSB7803については東方の第2次大極殿とほぼ同位置にあり，大型であることから　**C期大極殿**
大極殿に比定された。基壇の存在を示す盛土や身舎の柱位置を示す掘形や根石などの痕跡はなく，はたして完成していたか否かについては問題がある。

この調査の主目的であった「第1次大極殿」がA・B期になく，C期に出現していることについて，調査者達は従来の第1次内裏・第1次大極殿というイメージでこの地を想定するかんがえ方を根本的に改めなければならないことになった。一方，C期大極殿の存在を疑問視する意見強く，この地域をどのように理解するかについて混乱をを増すばかりであった。

第69次調査ではバルーンを使い，第72次調査ではクレーン車をつかって遺構の空中写真測量

1）『年報1973』p. 20

を実験的に行なってきたが，この調査ではヘリコプターでの空中写真測量を積極的にとりいれ，前後３回の撮影を行なった。

G　第81次調査

第81次調査はかつて民家があり，部分的に調査せざるをえなかった 6ABO 区の一条通りぞいについて，整備の事前措置として３回にわけて調査した[1](fig.７・８)。この小規模調査は第１次内裏・大極殿地域の北限を再検討する絶好の機会であった。Ａ期の北面築地回廊の南雨落溝SD130とその南側に礫敷がひろがること，Ｂ期に縮少したとかんがえられる北面築地回廊の北側柱列の足場痕跡を発見したこと，あるいは第81次中・西調査で，造営時の埋立整地状況を具体的に把握した。一方，大膳職の南面築地 SA109の下層整地土から東大寺式軒瓦6732A，6691A，6272型式が出土し，その構築が天平末年から天平勝宝年間にかけての時期と推測され，かつて平城宮創建時に埋立てたとかんがえてきた池SG149の埋立時期について疑念がでた。

北限の再検討

H　第87次調査

第87次調査地は，第１次内裏・大極殿地域の北辺にあり，第69次調査地に接する西側に展開する台地（6ABP—A・D地区）とそれよりも一段低い東側の低地（6ABC—U・V地区）とが発掘区の中央でわかれる。調査はこの地区を南北にわけ，２回２年にわたって行なった。検出した遺構の時期区分は，Ａ期＝奈良時代前半，Ｂ期＝奈良時代後半，Ｃ期＝奈良時代末から平安時代初期にわけられ，従来の見解ととくに変化していない。しかし，時期区分を莫然といい，具体的な実年代をさけているのは，絶対年代をしめ有力な遺物が出土しなかったことにもよるが，1974年から開催している「内裏検討会」において時期区分の議論が百家争鳴の様相を呈し統一的な見解をえられなかったからでもある[2](fig.９)。

Ａ期　郭内では南面を画する塼積擁壁SX6600が，直線的にのびず，発掘区西南隅で曲折して東南方にのびることがあきらかになった。東面築地回廊 SC5500 は第27・第41次調査とほぼおなじ状況で出現し，西雨落溝 SD3790 のほか２条の暗渠もあり，発掘区中央部には門がある。この築地回廊をはさむ東側は約１m低くなっており，築地本体の想定線あたりから東側の基壇が大きく削りとられ，東側の南北塀SA3777との前後関係についてはあきらかにしえなかった。なお SA3777 には柱穴を欠落しているところがあり，東面の門を想定した。外郭には１棟の小さな南北棟建物SB8330があり，それは同じくＡ期につけられた南北溝 SD3715によって破壊されている。また，この時期における大小の土壙が多く，造営時の土取場が想定された。

屈曲する塼積擁壁

Ｂ期　北面築地回廊 SC6670 と東面築地回廊 SC8360 を雨落溝をふくめて検出した。後者の側柱痕跡はよくのこり，第27・第41次調査とはことなる柱間寸法であることが判明し，Ｂ期に再建した別個の築地回廊が存在することがわかった。またＡ期と同位置に門を開いている。郭

Ｂ期築地回廊

1）岡田英男・藤村泉・岩本圭輔「平城宮跡とその周辺の発掘調査」『年報1974』p. 26
宮本長二郎・川越俊一・高瀬要一「平城宮跡と平城京跡の発掘調査」『年報1975』p. 15

2）山本忠尚・岡本東三・綾村宏・中村雅治「平城宮跡と平城京の発掘調査」『年報1976』p. 19

内では，北と東側を小さな素掘溝 SD8214・SD8216でかこむ範囲内で，4棟の建物 SB8302・SB8245・SB8215・SB8210を新たに検出した。それらの建物は，東西棟建物を配する第69次調査地とはことなって，いずれも南北棟建物であり，柱間を10尺等間とするきわめて計画性のつよい配置をしめしている。SB8245はそれらのうちもっとも大きく，7間×3間の総柱建物である。外郭では南北溝 SD3715にそって2棟の南北棟建物 SB8320・SB8240がある。

南北棟建物

C期　築地 SA3800A がその雨落溝とともに発掘区を南北に貫通し，南端部には掘立柱の門 SB8310 を開いている。郭内東北隅には西と南を塀でかこみ，さらにそれを塀で南北に2分したそれぞれに東西棟建物 SB8218・SB8219があり，後になって規模を拡大して建替えている（SB8222, SB8224)。また，発掘区西南隅には2面廂の南北棟建物 SB8300 があり，その北側に小さな東西棟建物がある。外郭には，郭内から南北溝 SD3715に導く排水路 SD8227・SD8607があり，SD3715の西岸に小建物 SB8325があった。

D期　遺構は外郭にある。すなわち築地 SA3800Bと南北溝 SD3715 とのほぼ中間に，東西に溝（SD8237, SD8239）をつけ，中心に南北塀SA8238をおく施設があり，南端では柱間をひろげて門（SB 8335）にしている。ここでいうD期とはC期の遺構よりも新しいという意味で，C期のある時期に築地の外郭を囲む施設として新設した可能性もあるとかんがえた。

今回の調査によって，第1次内裏中枢部の構造があきらかになったわけだが，A期の築地回廊 SC5500と南北塀 SA3777 との前後関係については，明確にしえなかった。C期の郭内東北隅の建物配置については，平安宮古図にあらわれる昭陽舎・淑景舎の配置との類似性が指摘され，この地域が内裏である可能性をつよめた。

中心部調査の完了

I　第117次調査

第117次調査は第1次内裏地区の高台とその南面の礫敷広場とを結ぶ地域であり，この地区の南・西・北はすでに調査を終えている。報告書作成には，この地区の調査が不可欠のものとかんがえ，第87次調査後3年をへて調査した。このたびの時期区分は，A期＝和銅～天平勝宝末年，B期＝天平宝字年間～奈良時代末期，C期＝奈良時代末期～平安時代初頭である[1)](fig. 10)。

台地と広場の接点

A期　東面築地回廊は，雨落溝・足場の状況から2時期にわかれることが提唱された。そして，その間に第87次調査で問題になった南北塀 SA3777 がたてられるとかんがえた。塼積擁壁 SX6600は第87次調査で検出した入隅部から結局東南へ15mのび，そののち長さ・幅とも15mで南へのび平坦面となる。これが斜道 SF9237A である。

斜　　道

B期　塼積擁壁SX6600が南へ20mのび，石積擁壁 SX9230となる。斜道は傾斜をゆるめてなお存続するSF9232B。SF9232Bが広場に移行するあたりに建物SB9220がある。この建物は5間×3間の東西棟建物で，壁体のない吹放ちであったことが想定できる。発掘区西端中央部に井戸 SE9210 がある。掘形の1辺が約8mという大きなもので，校倉の校木を転用して井戸枠を組みあげている。この井戸は平安時代まで変形しながらのこる。この時期の築地回廊 SC8360の痕跡は今回の調査地では消失しているようであった。

石積擁壁

C期　前後2小期に区分できる。C_1期には東面築地 SA3800Aが，雨落溝をともなってつく

1）菅原正明・毛利光俊彦・亀井伸雄「平城宮跡と平城京跡の調査」（『年報1980』）p. 23

られている。井戸SE9210の北にある東西塀SA7130がSA3800Aにとりつく。C_2期になると，築地が土塁SA3800Bに改作される。第87次調査で検出した郭外で東西に溝を配する南北塀SA8238がつくられる。

東半部調査の完掘

この調査によって，ようやく第１次内裏・大極殿地域の東半分をほぼ完掘した。第117次調査の遺構時期区分は，周辺の調査成果を加味しておこなったものであり，この調査地のみで，時期決定を行なったのではない。たとえば，A期のSA3777の位置づけは，南接する第27次調査の検討によったものである。さらにこの調査では，C期を２小期に分けたが，そのC_2期の時期を平城上皇の時期ないしは，平城天皇第三皇子高岳親王に平城旧宮を賜ったときに比定した。

J　内裏検討会

1974年段階で，平城宮の中軸線上に位置する第１次内裏と，東方に位置する第２次内裏の主要部の発掘がほぼ完了した。同じ内裏とよびながら，遺構の配置などにかなり差異がみられることや，両地域の機能上の差異などを比較検討する必要を生じてきた。一方，上述の発掘経過からみてあきらかなように，検出遺構に対する認識が調査地点がかわるたびに変化してきた。調査部員相互の意思疎通をはかるため，部内の討議集会を開催することにした。1975年１月に第２次内裏，1975年７月に第１次内裏，1976年１月に第２次内裏，1978年１月に第１次内裏と都合４回，時々の発掘成果や遺物の整理結果をつきあわせながら，討議をかさねた。

討議集会

討議の結果，統一的な見解をえるというよりは，いくつかの異論が整理統合された。大勢としては，**1**奈良時代当初の大極殿はこの地域にありSB7200がそれに比定される，**2**奈良時代末期から平安時代初期には内裏であったという点については了解しえたのである。1978年の第４回検討会のときには恭仁宮大極殿＝山背国分寺金堂の発掘結果があきらかになり，天平11年に恭仁宮へ移建した平城宮大極殿がSB7200なのか，または第２次の大極殿であったかについて論議がかわされた。翌年，平城宮第２次大極殿の発掘がなされ，その規模が小さく恭仁宮へ移建したのは第２次の大極殿でありえないことが確定的になった。

第１次大極殿の確立

遺構の時期区分について異論が集中したのは，東面の区画施設についてであった。築地回廊基壇の遺構面が浅く，削平が著しいうえに礎石痕跡などの重複関係が少ないことが，問題を複雑にしたもっとも大きな原因である。第41次調査時の検討によって創建時の東面築地回廊の全長は1060尺であり，6ABO区の東西石敷溝SD130が北面築地回廊の雨落溝にあたるとんがえたのは確定的にみえた。しかしながら，第81次調査において，SD130の下層に通じるとおもわれる整地土層から東大寺式瓦が出土するにおよんで，当初はもう少し南寄りにあったのが後に拡大したとかんがえるべきとの説がだされた。他方，東西築地回廊の基壇を掘りこんで建てた南北塀SA3777の処遇については二転三転をくりかえすことになった。

SA3777の問題

宮殿名の比定についても一様でない。この地域を奈良時代初頭から中宮とかんがえる説，中宮と中宮院は同じとする説，中宮と内裏と区別するかんがえ方などさまざまな意見がでた。

今回の報告にあたっては内裏検討会の成果に立脚し，かつて第１次内裏・大極殿とよんだ地域を第１次大極殿地域とよびかえ，第２次内裏は単に内裏といい，第２次大極殿・第１・第２次朝堂院の語は従来どおりのこすことにした。

3 調査日誌

A 第27次発掘調査

6ABE区K地区，6ABD地区，6ABQ区B地区，6ABR区P地区
1965年7月24日～1966年1月17日(fig.2)

7・24 表土の排土開始。

8・21 K地区：発掘区東方から遺構検出開始。厚さ15～25cmの灰色礫混り土を除き，粘土面を出し遺構の検出を行なう。

8・23 K地区：南北溝SD3715を発見。この溝は発掘区を南北に貫通する模様。

8・24 K地区：SD3715の西岸ぞいに礫敷が南北にのび（幅約3m），それから西は褐色土となる。部分的に土器溜りの土壙がひろがる。

8・27 K地区：褐色土を除いて遺構検出を行なうことにする。

8・28 K地区：東西木樋暗渠SD3770の埋土(暗灰色土）を発見。KM16でSD3765と交差する。重複関係ではSD3770のほうが新しい。15ラインで南北塀SA8238の柱穴を検出。

8・30 K地区：SA8238の柱穴を南北に追跡。重複関係からみてSA8238が木樋暗渠SD3770よりも新しいことがわかる。

8・31 K地区：17ラインから西では褐色土が薄くなり，その下層が黄色砂質整地土となり，この面で遺構検出を行なうことにした。

9・2 K地区：南北溝SD3765の西側約5mをへだてて漆喰片が南北に散布している。

9・3 K地区：漆喰の散布面で遺構検出。南北塀SA3777の柱穴が現われはじめる。その東に接して，SD3802が南北にはしる。

9・4 K地区：漆喰散布がとぎれ礫混りの黄色土にかわっていく。SD3770を東に向って追跡。

9・8 K地区：SA3777の西側にそってならぶ2列の小柱穴列(のち足場SS3795となる)を発見。P地区：SD3770の木樋はPM23でおわる。22ラインで南北にのびる2列の小柱穴列（のちに足場SS3795となる）を検出。

9・13 B地区：東南隅で東西築地SA3810を貫通する凝灰岩切石積の暗渠SD3815を発見する。水田の畦畔として，基礎部分のみをとどめる。

9・16 P地区：K地区との境になる畦畔は南北築地SA3800の痕跡である。23ラインで玉石を敷きつめた南北溝SD3790がある。PM23でK地区にのびるSD3770と結んで東へ流れる。土壙SK3787を検出。K地区：SD3715を本格的に掘りはじめる。遺物が比較的多い。

9・20 K地区：KR09付近のSD3715の両岸には杭を打ちこんでおり，橋SX3720が架けられていたことがわかる。これをはさむ東西の検出面は固く，道路SF3742に想定する。P地区：南辺で東西塀SA3740を検出，さきにK地区で検出している南北塀SA8238につながるものとおもわれる。PQ23で東西築地SA3810の構築状況を探るためトレンチをいれる。築地南面の遺構検出面である

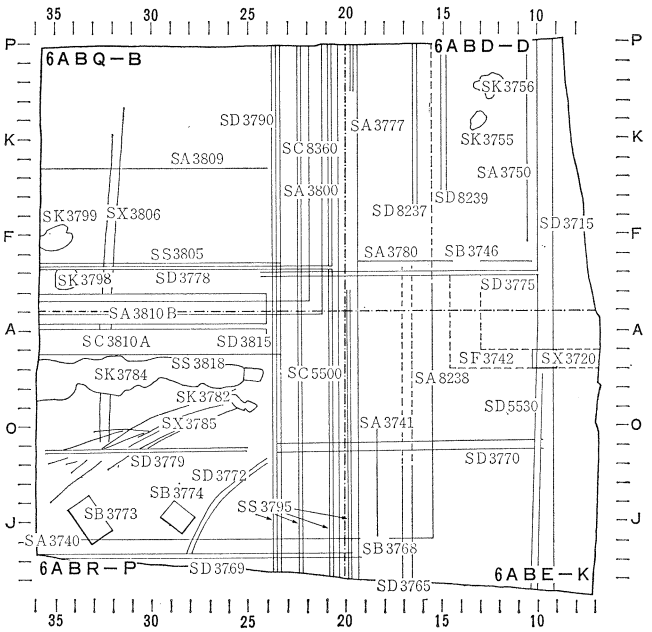

fig. 2 第27次調査地の主要遺構

灰褐色砂礫層が，築地の下にもおよんでいることがわかる。

9・21　K地区：SD3715の発掘完了。 P地区：18日から検出していた中央部の轍痕跡 SX3785 をほぼ掘りおえる。その痕跡の一部はSD3784（のち土壙に変更）のうえにおよんでいることから，東西溝SD3784 よりも新しいことがわかる。

9・22　P地区：西南隅で棟通りを北西・南東にとる SB3773 を検出，これは平城宮造営以前のものとみられる。B地区：礫敷面で本格的な遺構検出を行なう。

9・24　P地区：北方で東西にのびる SD3784 を掘りはじめる。南辺の SA3740 にそって乱杭の痕跡あるが，畦畔にそっているので水田に関係するようにおもわれる。B地区：32ラインに南北に走行する轍 SX3806 がある。

9・27　P地区：SD3784 の北岸にそって 東西塀 SA3818(のち足場に変更)があり，SD3784 と重複するところでは溝のほうが古い。 乱杭の痕跡は28ラインでとまる。SB3773 と同じ方位をとるSB3774を検出する。B地区：32ラインにそって轍痕跡があり，これはP地区の SX3806 と一連のものらしい。礫がつまっているので，造営時の遺構であろう。

9・30　P地区：PA20の凝灰岩暗渠SD3815の底石は瓦敷の上にすえている。 この暗渠は SD3790 とはつながらず，築地が２時期にわかれる可能性がある。

10・2　B地区：D地区との境に土塁状にのこる南北築地 SA3800は築地回廊になるらしい。 P地区：さきに検出した22ラインの足場と東で相対する南北足場を検出(SS3795)。

10・4　K地区：18ラインにそう黄色整地土の面から南北塀 SA3741 を検出， この塀は南側の SA3740と連結する可能性がある。

10・5　D地区：SA3777 の北延長部の 柱穴を検出しはじめる。

10・7　D地区：18〜19ラインにかけて漆喰片が顕著に散布する面がひろがる。築地回廊の壁土であろうか。

10・10　B地区：P地区で検出した SA3800 の西側足場SS3795を北に向って追跡。

10・12　K・P地区：写真撮影。

10・14　K・P地区：実測準備。

10・15　D地区：Hライン以南では礫層と暗褐色土をのぞき茶褐色土の面で遺構検出を行なう。

10・18　B地区：土壙 SK3799 から埴輪・須恵器など古墳時代の遺物が出土し古墳時代の遺構であることがわかる。

10・19　B地区：南寄りで東西塀SA3805を検出。これは SA3810 を はさんでP地区の SA3818と対応している（のち，この２条の塀は 築地 SA3810 Bの前身である築地回廊 SC3810A の足場になることがわかる)。 D地区：K地区から 北へのびる SD3715を検出。その西岸に南北塀SA3750がある。K・P地区：実測開始。

10・22　D地区：発掘区南寄りに SD3715 に注ぐ東西溝 SD3775 を発見。素掘の溝だが，DC13・DC14 では側と底に安山岩を敷いている。部分的に暗渠にしたのであろう。 この北岸 ぞいに 東西塀 SA3780を発見する。

10・23　D地区：黄褐色礫混り土で遺構検出をつづける。この地区の南半では黄褐色礫混り土層がなく，暗褐色混り土層になっている。

10・25　D地区：16ラインで南北溝 SD3765 を検出する。

10・29　B地区：遺構検出を再開。はじめに黄褐色土の面で東西塀SA3805を追跡する。

11・4　D地区：SA3777の西側で２列の足場 SS3795を検出。

11・5　B・D地区：東西溝 SD3775 は上下２時期にわかれ，20ライン以西には暗渠の痕跡をとどめる。

11・9　B・D地区：写真撮影。

11・11　B・D地区：実測開始。

11・19　K・P地区：実測終了。補足調査開始。

11・24　K地区：SA3777 の柱筋で 根石痕跡を３個所発見する。

11・27　K・P地区：写真撮影。

11・29　P地区：下層遺構の検出をはじめる。

11・30　K地区：SA3800 を精査。 犬走りをおおう赤褐色の整地土には少量の瓦片を含む。

12・1　K地区：18ラインと19ラインとの間で段がつき東に傾斜する。SA3777の基壇になるか。

12・2　K地区：南北溝 SD3765を掘る。 なかから，木簡などとともに第２次内裏と同型式の瓦が多く出土した。

12・7　SD3815とSD3770の写真撮影。

12・8　B地区：SD3790 は西方の 礫敷面と同じ時期である。 それに対して東西塀 SA3805は礫敷面から掘りこんでいる。K地区：SK3730を発掘。

12・10　K地区：SD3770 の木樋を とりあげる。建築部材を転用したもの。

12・22　D地区：SD3775 の石敷部分を精査。

1・8　D地区：東西塀 SA3780 の柱穴はすべてまとまる。13ラインの柱間が広く門になるらしい。SD3715西岸の塀 SA3750とは時期がことなるようである。

1・17　発掘調査完了。

B　第41次発掘調査

6ABE区M・P地区，6ABR区Q地区，6ABS区E地区

1967年7月1日～11月23日（fig.3）

7・1　表土の排土開始。

7・27　M・P地区：発掘区東辺から遺構検出をはじめる。床土直下の茶褐色礫混り土(二番床土)を除き，黄褐色粘土の面まで下げる。

8・1　M・P地区：MM07～PE07の間で小柱穴が出現しはじめるが，まだまとまらず。

8・4　M地区：ML09以北で南北溝SD3715の輪廓があらわれる。

8・10　Q地区：QG22，QH22で根石を検出。南北に15尺はなれて存在し，回廊の側柱になる可能性がつよい。QH23・QL23に南北溝SD5588があり，ED22・QH22・QI22に東西溝がある模様。ED22の溝は木樋暗渠SD5560である。

8・11　M地区：ML20以北で南北柱列SA3777の柱穴が出現しはじめる。

8・12　M地区：20ラインにそうSA3777の柱穴が11間分，15尺等間で出揃う。この柱穴は築地回廊SC5500の基壇に掘りこんだもので，柱根をとどめるものもある。Iラインの東西溝SD5563は上下2層に分かれ，下層に木樋暗渠が埋設されている。HラインのSD5562も木樋の暗渠らしく，基壇築成後にもうけている。

8・16　M地区：ML20付近で築地回廊SC5500の東限を探る試掘坑を設定。築地の崩壊土に想定される黄色礫混り土が，ML19～ML16で厚さ約10cm内外でひろがる。SD5563はMI19で終り，黄色礫混り土から掘込んだ開渠SD5564が東流する。

8・17　M・Q地区：ML19～QL21以北では，南北塀SA3777の西側に接して2穴で1組となる小柱穴列，東側にある南北溝SD5575，および溝に接したり重複する小柱穴列を検出。MH16では東西暗渠SD5562がなお東方にのびる。

8・21　M地区：SD5563とSD5562の構造をしらべる。SD5563は柱の転用材らしい。

8・23　M地区：ML09・ML10以北で2条の南北溝SD3715，SD5530を発掘しはじめる。MS07付近では南北棟の小建物SB5520がまとまる。

8・29　M地区：MH08・MH09以北で南北棟の小建物SB5510を確認。東西溝SD5564のうえには南北溝SD5530が掘込まれており，SD3715に注ぐ。MG07・MG08では東方から東西溝SD5505がSD3715に注ぐ。

8・30　M・P地区：PS14～ME14に南北溝SD5559がある。その西側は盛土になっており，築地にともなう雨落溝の可能性がある。西方から流れてくる木樋暗渠SD5560はPC14で開渠SD5558となり，SD3715に注いでいる。

9・2　M地区：MM09以南のSB5510を検出。

9・11　E地区：SD5560の検出をはじめる。

9・13　E・Q地区：発掘区西辺を拡張する。

9・14　E・Q地区：拡張区において遺構検出を行なう。QI24以北で検出した南北溝SD5589は東西溝SD5563の上層につながって東へ流れる。その東に接して流れる南北溝SD5588は第27次調査以来，SC5500の西雨落溝に想定されている溝で，QH23でL字形の入隅となる。ED23～QG23にある南北溝SD5561は木樋暗渠で南面築地回廊SC5600を横断し，さらにEC23でSD5560と結合して東へ流れる。この曲折部分に西から流れてくる東西溝SD5565が接している。SD5565は溝中に礫が詰り，盲暗渠に想定しうる。ED24とQG24で，SC5600の側柱に比定できる根石がある。

9・16　Q地区：QR22以北で2穴で一対になる小柱穴列SS3795を検出。

9・19　Q地区：南北溝SD5588とSD5589は，北方から流れてくるのではなく，QM24付近で西方から流れてきたもの(SD5590・SD5591)。

9・22　Q地区：QR23・QR24以北で南北溝SD3790とSD5607を検出し，それとともに小柱穴列SS3795があらわれる。写真撮影準備。

9・23　写真撮影。

9・25　写真撮影終了。実測準備。

10・4　実測終了。

10・5　補足調査開始。

10・11　M地区：SD3715の西岸に小柱穴SX5540がならぶ。

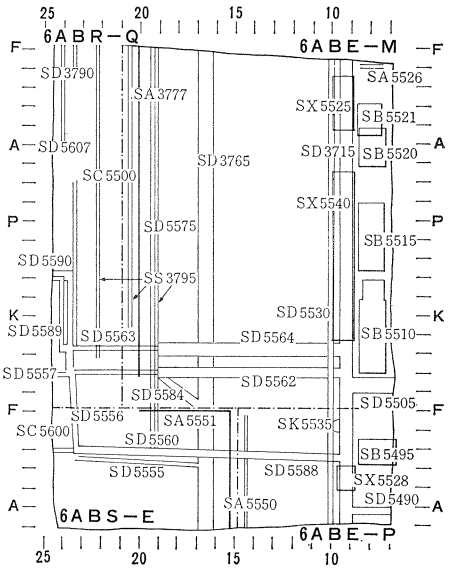

fig. 3　第41次調査地の主要遺構

10・21　M地区：16ラインで下層遺構にぞくする南北溝SD3765を発掘する。

10・31　Q・E地区：SC5600を横断するSD5561には前身の南北溝SD5556があり，それがSD5560の南にある東西盲暗渠SD5555に連結していることがわかる。

11・1　P地区：PS15～PE15，PE15～EE15に曲って南方にのびる塀SA5550とSA5551があることがわかる。

11・8　写真撮影。

11・9　実測。

11・11　現地説明会。

11・13　再度の補足調査。

11・23　発掘調査終了。

C　第69次発掘調査

6ABP区A・B・D地区
1970年8月3日～11月21日(fig.4)

8・3　表土の排土開始。

8・13　A地区の北辺とB・D地区の北辺とから遺構検出をはじめる。A地区：厚さ約10cmの褐色礫混り土をのぞき遺構検出をすすめる。この土層は整地土らしく瓦片などの遺物をふくむ。B地区：A地区と同じ礫混り土をのぞく。D地区：礫混り土層がない。各地区ともすでに遺構出現。

8・14　A地区：北辺の一条通り沿いに根石をもつ浅い柱穴が現われる，北面築地回廊SC6670の南側柱。AS27～AS31に3間分の柱列SA6635がある。B地区：柱穴が出はじめるが，いまのところまとまらず。

8・17　D・B地区：柱穴多く重複している。

8・19　B地区：BR29～BR34の北側で建物SB6655がまとまる。南北棟建物2棟か，東西棟建物かは不明。Rラインの柱穴の上に東西溝SD6607があり，敷石をぬいた痕跡がある。D地区：東西に規則的にならぶ柱穴が多い。重複あり，建物規模など不明。A地区：床土の残土を除く。

8・20　B地区：BR28～BR34以北の柱穴は，2列にならんだ南北棟建物（のち1棟の東西棟建物SB6655となる）であり，その南妻の柱穴は東西塀に重っている（東西塀に想定した柱列はのちにSB6660Bの孫廂になる）。D地区：Sラインの柱穴検出。2時期以上の重複があり，DS44～DS46では礫を密に詰めた根石状遺構を2間分検出（のちにSB6611とSB6630となる）。DS40～DS40のSB6611の柱穴に重複する柱穴には径20～30cm大の石をつめている（SB6620の柱穴）。

8・22　B地区：Qラインで6間分の柱列を検出。さきにRラインで東西塀とした柱列は，SB6660Bの孫廂となる。

8・24　B地区：SB6655の柱穴はすべて出現，5間×3間の東西棟建物で，中央間に2列の柱穴を設けている。D地区：Rラインでも柱穴が重複し，新しいSB6620の柱穴では根固め石をとどめるものがある。A地区：床土排土終る。

8・25　A地区：Cラインで7間分の東西柱列を発見（のちSB6663の南側柱となる）。BQ35・BR35に3条の東西溝（北からSD6607，SD6609，SD6606）があり，いずれも敷石の一部と抜取痕跡をとどめている。

8・26　A地区：DラインでSB6663の身舎南側柱を検出。北接する東西塀SA6624は，すでに検出している南北塀SA6623とAE33でT字形にまじわる。D地区：QラインにSB6610・6611（発掘時，南のSB6610と北のSB6611を同一建物にかんがえた）とSB6620の柱列がなお存続する。DQ48では新しい時期の礎石がのこり，その東4間分の柱位置では浅い礎石抜取痕跡がのこる（SB6630の身舎南側柱）。

8・27　A地区：AB27～AB34のCライン以北の建物SB6663は，南北に廂がつく桁行7間の東西棟建物になる。AE31，AF31にはこの建物の東西に間仕切る柱穴がある。AE30から北へのびる南北塀SA6625を検出。B地区：QラインでSB6660の身舎北側柱を検出。

8・29　A地区：AHラインで予測外の東西柱穴列があらわれる。SB6663の孫廂か別建物になるかは不明。D地区：Oラインで9間分の東西柱穴列を検出（SB6610の柱穴）。この付近から南は遺構検出面が一段低くなる。

8・31　A地区：SB6663は孫廂のある建物，Iラインまで足場がつづく。AD35～AG35で西へのびる柱穴3間分をだす(SB6650)。B地区：BQ31～BQ36から南へのびる両廂付南北棟建物SB6622の存在を確認。D地区：現在までに検出した建物は新旧2時期に大別できる。いずれも桁行9間の大建物。新しいSB6620はQラインが南廂となり，それ以南にのびない。北廂は発掘区外。古い建物SB6610・6611は梁間5間分検出したがまだ南へのびる模様。この建物は他に例をみない大規模な総柱建物になろう。

9・1　B・D地区：Oラインで地山と整地土との違いが東西に一直線に走る。つまり，Oライン以北は地山の土で，それ以南は整地土である。理由はいまのところ不明。

9・4　A地区：AM27～AM29に東方から北方へL字形に曲る素掘溝（SD6631・SD6632）がある。AM33～AM35には浅い素掘溝がある（のちに

東西棟建物SB6621の身舎筋の布掘地業となる)。B地区：SB6622は桁行5間分を確認するが，南方は発掘区外になる。SB6640は3間×2間の東西棟建物となる。

9・7　A地区：AN27～AP27から西方にのびるSB6669は，7間×2間の東西棟建物となり，SB6666とは20尺の間隔がある。D地区：37ライン上の南北玉石溝SD6612は発掘区の南限までのびている。

9・8　A地区：南北塀SA6625はAP29で西方に折れ曲る(SA6626)。それにともないSA6625に平行するSD6632もAQ29で西方に折れ曲る(SD6633)。SA6626が重複する素掘溝SD6618を検出。この溝はSB6669の雨落溝であろう。B地区：SB6622は桁行6間以上となるがそれ以上は発掘区外となる。D地区：Lラインからは一段低く，顕著な遺構なし。このため，SB6610・6611は発掘区北限から8間分を検出したMラインでおわる。

9・9　A地区：一条通りの擁壁下で先に検出していたSC6670の根石の不足分を探す。B・D地区：Lラインのコンクリート水路の南側では遺構がなくなって，瓦片をふくんだ浅い土壙が所々にある。E・F地区：トレンチを設定する。

9・10　A地区：発掘区東限にある柱列(のちに南北塀SA6629になる)の北限は，発掘区外にのびる。F地区：柱穴が3穴出現するが，予想したSA6624の対象位置の塀ではないようである。E地区：拡張によってSB6620が身舎7間×3間に15尺の四面廂をともなっていることがわかる。SB6610・6611は9間×9間分の柱穴を検出したが，さらに北方へのびる可能性もある。

9・11　本日で遺構検出を終え，写真撮影の準備にとりかかる。

9・17　写真撮影。

9・22　写真撮影。

9・26　現地説明会。

9・30　実測準備。

10・15　実測終了。補足調査開始。

10・19　B・D地区：Oラインで東西にのびる整地土の性格を探るためDN42以西と発掘区東限にいれたトレンチがほぼ掘りあがる。BN28～BO28では，約1.5m下降して北方の地山面との間に段(SX6600)を生じ，南面は礫敷面をなす。礫敷面に塼片が散らばる。DN43～DN46では固い黄色粘土の盛りあがりが出現した。DN44～DN45では礫敷となる。

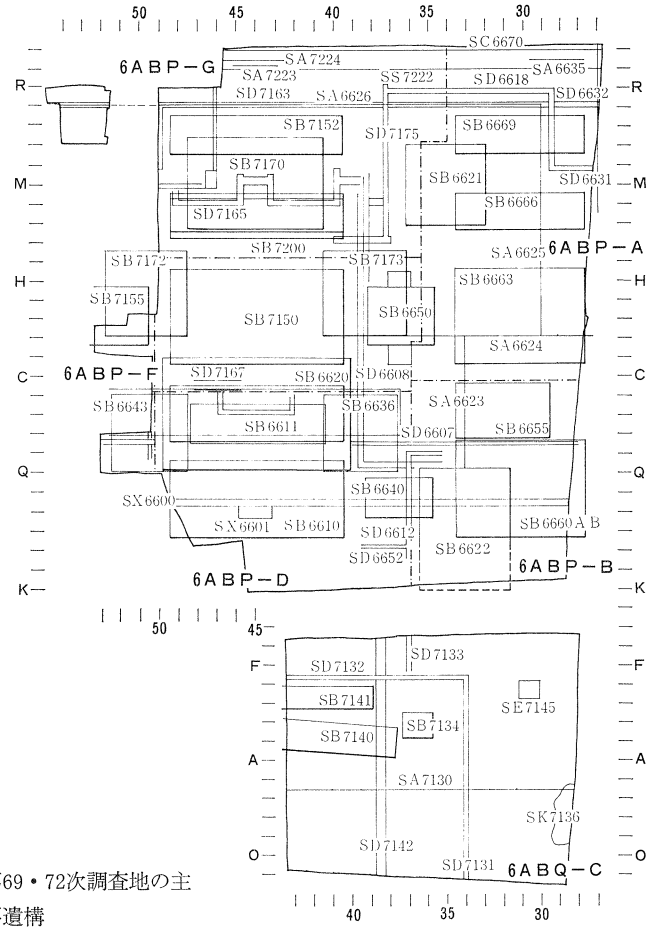

fig. 4　第69・72次調査地の主要遺構

10・20　B・D地区：SX6600の基部に塼をならべて積みあげた状況が明らかになる。本来は段の前面に擁壁風に積み上げたのであろう。DN43～DN46では階段の可能性を考え入念な精査を加えたが，黄色粘土の盛り上りがバラス敷のうえにあり塼積も左右につながっているので除去することにした。SX6600を明らかにするためB地区にもトレンチを拡張する。

10・24　B・D地区：下層遺構の実測。

11・5　B・D地区：塼積にそって礫敷を除くと，DO42以西で塼積にそう小溝SD6602がある。塼積の抜取痕跡か。DN44・DN45で2間×1間の掘立柱遺構SX6601を検出，階段か。中軸線は平城宮の中軸線にのるらしい。

11・8　D地区：SX6601の南に約30cm間隔でならぶ小柱穴列を検出。

11・19　発掘終了。埋戻し開始。

D　第72次北発掘調査

6ABP区F・G地区
1971年4月16日8月11日（fig.4）

4・13　表土の排土開始。

5・17　F地区の南辺から遺構を検出をする。旧八木邸の残材の整理に手間どる。

5・21　F地区：南北玉石溝SD6608をFB39で検出。Bラインで重複する古いSB6611と新しいSB6620の柱穴列が出現しはじめる。FC37・FC38で切石の凝灰岩が東西にならぶが，性格不明。

5・22　F地区：Cラインで新旧2時期の柱穴が重複している。新しい柱穴はSB6620の北廂。

5・25　F地区：Dラインで柱穴検出。SB6610・SB6611が北へ1間のび南北10間の建物になる。小柱穴の検出多し。

5・29　F地区：Gラインで柱穴列がならび（SB7150の身舎北側柱），FE44・FF44に間仕切柱の柱穴2つがある。SB6610・SB6611の南北柱間を8間とし，Cライン以北で目下検出している柱穴は，別個の建物に想定すべきことがわかる（のちSB7150となる）。SD6608はなお北上し，その東側は礫敷となる。FE39～FG39の柱穴は，SB6650の西側柱となり，第69次調査とあわせて3間×3間となり完結する。

6・1　F地区：HラインでSB7150の北側柱列がでる。また，それらにともなう小柱穴を多数発見する。SD6608はさらに北上し，FH39あたりから左右に浅い掘形をともなっている。

6・2　F地区：Iラインで東西にならぶ小柱穴列を検出。G地区：Jラインで9間分の柱穴を検出するが，東西両端の一間を除く柱穴には3時期の重複がある。中央の柱筋（のちSB7151Aの南側柱となる）が古く，北と南の柱筋（のちSB7170の南廂とSB7150Bの南側柱となる）が新しい。しかし，埋土の判別が困難で前後関係を誤認した柱穴もある。

6・5　G地区：GJ38～GJ41に東西溝SD7177がある。この溝はSD6608よりも新しく，GJ38で北へ流れてSD7175になる。

6・7　F地区：SB7150の足場である小柱穴を探す。第69次調査で発見しているSB6621が4間×5間の東西棟建物であることがわかる。

6・9　G地区：Lラインで3時期の柱穴が重なっている。古い2時期の柱穴はSB7151A・Bの北側柱となる。新しい柱穴（のちSB7170の南側柱となる）は，さらに北へのびる模様。Lラインの柱穴は溝状遺構SD7165を掘りこんたもの。この溝はGL40，GL44で北へ突出するが，いまのところ掘下げず。GL37で礎石据付痕跡を検出。第69次調査で発見したSB6621の西妻柱列にあたる。

6・11　F地区：FD51～FD53にトレンチを拡張する。

6・12　F地区：拡張トレンチで，東方のSB6650と同規模に予定しうる建物SB7155の柱穴が出現。

6・17　G地区：40ライン以西に重複する2列の柱穴がある。新しい柱穴はSB7170の身舎北側柱であり，古い柱穴はSB7152の南側柱となる。

6・18　G地区：SB7170の北廂の柱穴を検出。

6・19　G地区：GP40以西でSB7152の南側柱を検出。第69次調査地区から西へのびるSA6626の延長部を発見。またSA6626が重なる東西溝SD7163を検出する。F地区：FD49～FH49の拡張区でSB7150の西妻柱を発見し，この建物の桁行が9間であることがわかる。

6・21　F地区：FD50～FD53で東方のSB6650と対称位置に配置されている方形建物SB7155の存在を確認。G地区：SD7175はGQ37でL字形に東へ折れ，第69次調査で検出しているSD6623とつながる。この溝は上下2層にわかれ，上層は暗褐色土が堆積し，瓦片や土器片など廃絶期の遺物を混じえる。下層は灰色礫混り土が堆積し，遺物をふくんでいない。

6・23　F・G地区：FG46以北を拡張して建物群の全体を露出することとし，表土排土を開始する。G地区のTラインで北面築地回廊の南側柱を検出する。

6・25　G地区：SA6626はGQ49までのび，さらに西へのびる可能性がある。GN49～GP49で南北溝SD7162を確認。GJ48～GO48でSB7170の西妻

柱列を確認。７間×４間の東西棟建物になる。GJ49～GL49でSB7151，SB7220の西妻柱列を確認。GL48・GL49で東西溝SD7195がある。安山岩の石敷とおもわれるが，抜取痕跡しかのこっていない。

6・28　写真撮影。

7・5　写真撮影終了。実測準備。

7・15　G地区：古い溝状遺構SD7165を精査。この溝はGL39・GL40，GL44・GL45，GL49の３個所で北へ方形に張出しており，付根部に小柱穴がある。階段かそれに類するものだろう。だとすれば，溝が２条にみえるのは一つが凝灰岩地覆石の抜取痕跡で，他が雨落溝の痕跡ともかんがえられる。

7・16　補足調査。

8・6　クレーン車で写真測量を行なう。

8・11　すべての調査を終了する。

E　第72次南発掘調査

6ABQ区C地区
1971年５月８日～８月11日（fig.４）

5・8　発掘調査開始。赤褐色土の床土およびその下層の灰褐色土を排土。

5・12　灰褐色土の下にある黄褐色礫混り土の面まで排土しおわるが，２番床土らしくおもわれるのでもう一層下の灰色礫混り土まで下げることにする。

5・20　北辺から遺構検出を始める。礫混り砂質黄褐色土の面で遺構検出。石敷の南北溝SD7133を検出。安山岩の多くは抜きとられ，痕跡をとどめるにすぎない。CG32・CG33付近には風化した凝灰岩片が散布している。

5・22　東西溝SD7132はCE33で南へ折れ曲り，南北溝SD7131となって南下する。

5・26　礫敷面で全域の写真撮影。

5・29　礫を除き地山面で遺構検出を行なうことにする。

6・2　CC38・CD38以西で１間×２間以上の柱穴SB7141があらわれる。この柱穴は普通の柱穴とことなり，東西に長い長方形の掘形を掘り，南北12尺，東西20尺等間となる。CC35～CC37に２間分の小柱穴がある（のちSB7134となる）。類似の柱穴はCC42にもあり，そこでは瓦器片を混入しており，中世の遺構とおもわれる。

6・7　CA37・CB37以西で２間×７間以上の東西棟建物SB7140がある。この建物は西北に振れている。Rラインに東西塀SA7130があり，発掘区を横断している。CR38で南北溝らしきもの（のちSD7142となる）を発見する。

6・10　CR38で発見したSD7142は発掘区南限にまでのびる。写真撮影。

6・12　写真撮影。

6・14　実測開始。

6・29　発掘区南限にトレンチをいれ，整地状況を調査。地山面は東方で浅く，西方で深い。

7・6　発掘区西限でもトレンチをいれ，整地状況をしらべる。北方では浅いところで黄色粘土の地山があらわれ，南下するにしたがって地山が深くなる。ただし，整地土には遺物が混入しておらず，時期をきめがたい。

7・10～8・3　発掘を休止する。

8・4　発掘西限から遺構検出を再開。整地土は２層にわかれ，上層が暗褐色礫混り土，下層が暗褐色粘質土となる。上層には微量の瓦片や埴輪片を混えるが，下層はまったく遺物を含んでいない。CE38でSD7142の北端を検出する。

8・5　補足調査開始。CQ28で大型の土壙SX7136を発掘する。中世の瓦器をふくみ，井戸の可能性が大きい。

8・6　写真撮影。

8・9　CD30で井戸SE7145を検出。井戸枠は抜かれているが，底部にほぼ正方形の礫混り土がのこり，方形の井戸枠が組まれていたことが推測できる。なお，若干の遺物をふくむ埋土はきれいで，一気に埋めもどしたようである。

8・11　すべての発掘を終了。

F　第75次発掘調査

6ABQ区C・D地区，6ABR区G地区
1972年４月１日～６月20日（fig.５）

4・1　表土の排土。

4・12　発掘開始。茶褐色礫混り土を排除しながら，遺構検出にとりかかる。

4・14　G地区：南辺から遺構検出。Bラインに東西溝SD3769がある。Gラインで東西塀SA3740が発掘区を横断する。GC38・GD38に南北溝SD7142がある。浅く辛うじて痕跡をとどめる。GB42以北に南北溝SD7760がのびる。

4・17　G地区：GF37～GF39に広がる土壙SK7762を検出。GG42・GG43付近でSD7760と重複する土壙SK7767がある。いまのところ両者の前後関係は不明。GG30～GG32に轍痕SX3785があ

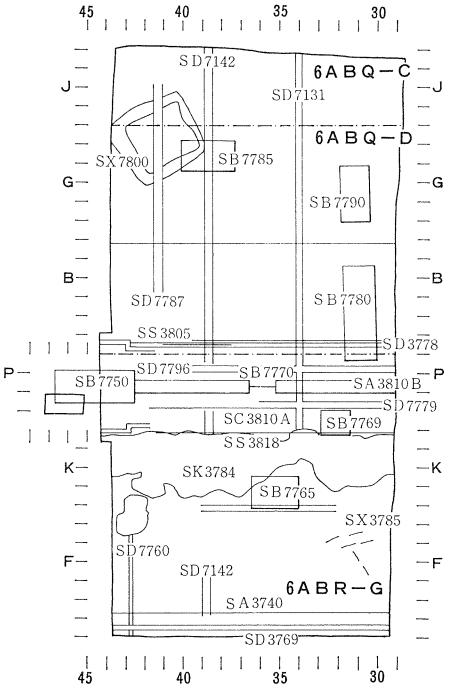

fig. 5　第75次調査地の主要遺構

る。赤褐色粘土に食い込み，暗灰色礫混り土が詰まっている。

4・19　G地区：GI35・GJ34付近に拳大前後の玉石を敷いた石敷面がひろがる。Jライン以北，発掘区を東西に横切る大土壙SK3784がある。土壙の上部には凝灰岩片が混り，上面には礫敷が広がる。一応，下部の木炭層に達するまで掘り下げることにする。

4・21　G地区：SK3784の北岸沿いに小柱穴があり，それは第27次調査で検出した東西塀SA3818の延長部にあたる（のち，南面築地回廊SC3810Aの足場になる）。

4・24　G地区：SK3784の発掘が終わる。Nラインで発掘区を横断する東西築地SA3810の検出をはじめる。GN34にSA3810にともなう南北暗渠SD7799がある。暗渠は切石の凝灰岩製。GN29～GN35に築地にともなう素掘りの東西溝がある。GM31，GM32で2間×2間の小建物SB7769を検出した。

4・28　G・D地区：GM41～GM43に屈曲する東西溝SD7772がある。凝灰岩片が堆積しており，築地中央門SB7750の地覆石抜取痕跡と判明。

5・1　G地区：中央門SB7750の柱穴を検出。DQ41～DQ43に北側の地覆石抜取痕跡SD7773がある。Pラインに築地SA3810の北側の雨落溝SD7776がある。この溝は玉石敷だったらしく，河原石の護岸をとどめる部分もある。

5・7　D地区Qラインに東西溝SD3778があり，その北岸に接して東西塀SA3805がある（のち，築地回廊の足場になる）。DQ39，DQ40ではSD3778とこれに重複するSA7776がある。

5・10　D地区：暗渠SD7799から北方に向ってのびる南北溝SD7131が出現しはじめる。

5・11　D地区：DB30・DB31以北の礫敷きを除くと，柱穴が出現する（のち南北棟建物SB7780になる）。SB7750の規模を明らかにするため，GL43～DQ43の西側に拡張区を設ける。

5・15　D地区：41ラインで南北溝SD7787を，38ラインで南北溝SD7142を検出する。

5・16　D地区：DD30・DD31以北の礫敷きを除いて柱穴を発見する。南北棟建物SB7790。

5・17　D地区：DG40にSD7787よりも古い斜行溝がある。堆積土に須恵器・土師器，あるいは埴輪片をふくみ，小古墳のSX7800周濠になるらしい。

5・18　D地区：DG37～DH37以西に小建物SB7785がある。斜行溝を追跡すると，方形にめぐることがわかるSX7800。埋葬施設はない。

5・21　写真撮影の準備をはじめる。

5・24　写真撮影。

5・25　実測準備。

5・27　実測開始。

6・2　実測終了。

6・3　補足調査開始。

6・14　発掘調査終了。

G　第77次発掘調査

6ABR区H・G・J地区

1973年1月13日～4月23日（fig. 6）

1・13　発掘開始。床土の残土を除く。

1・20　H地区：発掘区東限から遺構検出をはじめる。Cライン以北では暗褐色土（二番床土）を除き，礫敷面を出す。礫敷きの厚さは約10cm前後で北方へひろがる。HI26・HI27では東西方向にのびる凹みがあらわれる（のちに東西溝SD5590になる）。C～Hラインに瓦片の堆積が多い。T～Hラインでは，玉砂利を含む赤褐色の整地土がひろがり，一段低いSラインでは大粒の礫敷面になる。

1・22　G地区：GS～GAにかけて礫層下に黄色粘土が堆積する。このあたりでは礫層が薄く，黄色粘土面まで下げて遺構検出。

1・24　H地区：G～Iラインにかけて依然として瓦片の堆積多し，瓦片を露出することにつとめる。Fラインでは黄色砂質土が東西にのびる。

1・25　H地区：HG38の礫敷面上に凝灰岩の切石片が散布，ただし旧位置にあらず。

1・27　H地区：D～Fラインの瓦堆積は，HD40

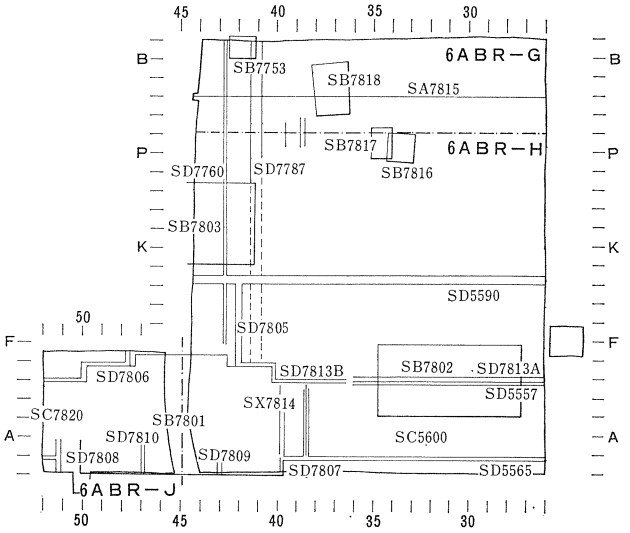

fig. 6　第77次調査地の主要遺構

で北に折れ，また西方にのびる。門基壇 SB7801 の北東隅をしめすようである。

1・29　H地区：42ラインで南北溝 SD7760 を発見。HJ41〜HN43で小柱穴を検出（のちSB7803の足場となる）。東西溝SD5590の発掘をはじめる。あまり深くなく，岸辺に礫が落下し，灰色粘質土が堆積する。HD43・HD44に門基壇 SB7801 の北張出し部があらわれる。階段になるか。北面の基壇地覆石抜取痕跡には青灰色粘土が堆積し，処々に大型の凝灰岩片が散布する。HC40 から東にのびる築地回廊 SC5600 の雨落溝は瓦散布の下にあるらしい。HE42 には両側に玉石をたてる南北溝 SD7805があり，これは目下検出中の礫敷と同時期である。

1・31　G地区：GJ41・GJ42 で先の第75次調査で検出した小建物 SB7753 の南半部を検出。H地区：HJ41〜HN41以西で発見した柱穴は，東西３間以上，南北４間の大型建物 SB7803 となる。身舎の柱穴はなく，身舎には礎石を据えたことを想定しなければならない。

2・1　瓦片の散布状況を記録するため，写真測量の準備を行なう。

2・2　バルーンで写真測量。

2・8　航空写真測量の準備。

2・9　航空写真測量終了。

2・13　H地区：HF26・HF27で井戸らしい大型の土壙があらわれる（のち，東西棟建物SB7802になる）。HC28〜HC30 に築地回廊の北側柱位置をしめす根石があり，方形掘形内に玉石の根石がのこる（のちに，SB7802 にともなう根石であることがわかる）。HT26〜HT32で小柱穴を検出。

2・14　H地区：大型土壙が掘立柱建物 SB7802 の掘形であることがわかる。柱抜取痕跡には木簡などの遺物が混入している。HD28〜HD23では，Cラインの根石と柱筋を揃える３間分の根石列がある。

2・15　H地区：HB27〜HB35 でも SB7802の南側柱を発見する。これによって，５間×３間の総柱建物になる。

2・23　H地区：SB7802 の柱位置を すべて確認する。この建物の南側柱列は築地回廊 SC5600 の心と一致しており，築地回廊の一郭を改修して増築したもののようである。HC37 で玉石敷の東西溝を検出，SC5600の北雨落溝になるらしい。HT35付近で発見した東西溝は基壇地覆石の抜取痕跡であろう。

2・26　H地区：HC37でSC5600の北側柱の根石を発見。HC38・HC39 に SC5600 の北雨落溝(SD7813)がのびている。

2・27　H地区：北雨落溝に南接して基壇の地覆石抜取痕跡がある。

2・28　H地区：南面中央門SB7801を精査する。削平され，根石など柱位置を示す遺構はない。HS41でSB7801の南東入隅部を検出。地覆石抜取痕跡と基壇土との違いがはっきりとあらわれる。

3・1　H地区：SB7802 の北側と 西側に大粒の礫敷面が あらわれる。軒の出の 想定位置と 一致し，雨落溝をかねているらしい。

3・5　G地区：３月２日以来，H地区のＪライン以北を地山面まで下げはじめたが，本日になってG地区41ラインで南北溝を発見する。下ツ道の側溝 SD7787の位置にある。Ｊ地区：SB7801の西半分を検出することにしＪ地区を拡張する。

3・7　G地区：GR36・GR37以北に小建物SB7818がある。いずれの柱穴にも礫が詰り，礫敷の後期にぞくすることがわかる。

3・9　Ｊ地区：JD46 付近に 凝灰岩片が 散布。基壇の地覆石ないしは階段の残石か。

3・16　ヘリコプターによる写真測量および地上からの写真撮影をはじめる。

3・20　H地区：写真撮影に平行して遺構検出。SB7802建設以前のSC5600の北雨落溝SD7813が現われる。底部に拳大の礫をしき，基壇側にやや大きな礫を積む。北岸はなく，小礫敷面に移行する。

3・23　H地区：SB7801の階段東北隅で下層の礫敷面があることをしる。HE43付近に幅約80cmの凝灰岩痕跡があり，その北方に礫敷面がひろがる。SB7802の柱抜取痕跡の調査をはじめる。柱根をのこすのは一穴だが，ほかに根固めの残材をとどめる柱穴もある。

3・27　写真撮影。

3・28　実測準備。

4・11　実測完了。

4・14　補足調査開始。トレンチをいれ，SC5600およびSB7801の基壇構造をしらべる。HT38でSC5600を横断する礫をつめた盲暗渠SD7807を発見。SB7801の掘込基壇の底には大型の礫を敷く。

4・23　発掘調査終了。

H　第81次東発掘調査

6ABO区E地区

1973年4月12日～7月18日（fig.7）

4・12　表土排土の開始。

5・21　遺構の検出開始。

6・16　EK83付近で凝灰岩切石暗渠SD8077を検出する。この暗渠は土壙SK8079を埋立てたのちにつくられたもの。

6・20　第7次調査であきらかになっている東西棟建物SB321の西妻柱が出現する。

6・21　発掘区北辺でSB321が重なっている東西玉石敷溝SD130が出はじめる。

6・25　EK76以西で東西にのびる溝状の遺構があらわれる（のち，溝ではなく連続する土壙SK8077，SK8079，SK8080となる）。

6・28　Jラインに想定される東西築地SA8100があらわれはじめる。築地の部分が高まり，その南北が土壙状の凹みになる。EJ69には門に想定しうる1対の柱穴があるSB8101。

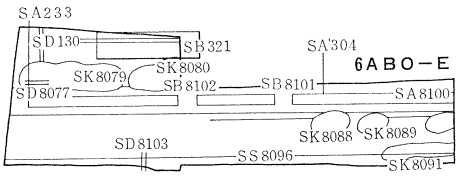

fig. 7　第81次東調査地の主要遺構

7・4　Iラインの礫層をはずすと東西に長い不整形の土壙となる。

7・7　写真撮影。

7・9　実測準備。

7・10　実測開始。

7・12　補足調査開始。

7・18　写真撮影。発掘終了。

I　第81次西発掘調査

6ABO区P地区

1974年1月7日～2月16日（fig.8）

1・7　遺構の検出開始。

1・11　発掘区東限の含礫黄褐色土面で遺構検出。Jラインに東西築地SA109があり，その南北に側溝がともなう。

1・14　PL26で柱穴を検出するが，それはすでにあきらかになっている南北塀SA120の南端にあたり，東西築地SA109にとりつく。発掘区西限でもSA109とその南北側溝がではじめる。

1・18　発掘区北限では，第2次調査で発見している東西棟建物SB131の南側柱穴が出る。

1・28　すでに検出しているSB145の東南隅柱穴を再度掘りあげる。

1・30　築地北側溝の堆積は一様でなく，溝の堆積にいくつかの溜りを生じている。

2・1　写真撮影。

2・2　実測。

2・12　補足調査開始。

2・15　この調査地は全体が盛土地であるため，トレンチをいれて整地状況を調査する。

2・16　発掘調査終了。

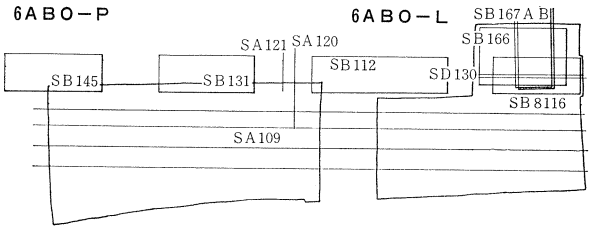

fig. 8　第81次中・西区発掘地の主要遺構

J　第81次中発掘調査

6ABO区L地区
1974年6月12日～7月23日（fig.8）

6・12　遺構検出開始。

6・18　第2次調査であきらかになっている東西棟建物SB166，およびそれが重複する南北棟建物SB167の柱穴を地山面で出す。

6・19　Nラインにある東西玉石敷溝SD130，およびその南方にひろがる礫敷が出現する。礫敷面を切込む新しい東西棟建物SB8116を掘りあげる。

6・24　Jラインの東西築地SA109とその南北の側溝を追求する。含礫茶褐色の整地土をはずすと土壙など遺構の輪郭があらわれる。

6・26　SA109の南北側溝は，溝というよりは不整形の土壙が連続した形をとる。南側溝からは溝に落しこんだ礎石2個がでる。

7・4　LG14以西では暗褐色の整地土が次第に厚く堆積しており，この土を除去しなければ，SA109とその側溝があらわれない。19ライン以西の観察では，さきに広い土壙状の落ちこみがあり，ある時点において黄褐色土で整地し，築地SA109と南北の側溝をつくったことがわかる。

7・12　写真撮影。

7・13　実測準備。

7・14　実測開始。

7・18　実測終了。

7・19　補足調査開始。SA109は側溝だけでなく，築地本体も2時期にわかれる可能性が出てきた。

7・20　Mラインの礫敷面の下からSB166の南廂柱穴が出現する（発掘終了後，SB166が礫敷面を掘込んでいるのではないかという意見がでた。写真等の記録によってSB166のほうを新しくした）。

7・23　発掘調査終了。

K　第87次北発掘調査

6ABP区A地区，6ABC区U地区
1975年7月2日～10月2日（fig.9）

7・2　発掘調査開始。

7・11　A地区：発掘区西辺で，すでに第69次調査で検出している，SB6663・SB6666・SA6624の柱穴を検出する。

7・12　A地区：第69次調査で検出しているSB6669，SA6629の柱穴を検出する。

7・22　A地区：西方から黄褐色礫混り土の面で遺構検出を行ない，次のような遺構を検出した。27ライン上で南北塀SA6629を15間分，AM18～AM27で東西塀SA8217を9間分。

7・24　A地区：AM17～AM28に東西溝SD6631，AE18～AE28に東西塀SA6624がある。

7・28　A地区：AJ23～AJ25以北に南北棟建物SB8210がある。AN23～AS23で東西棟建物SB8222の西妻柱列を，AF24～AK24で東西棟建物SB8224の西妻柱列を検出する。

7・29　A地区：AP20～AR20以西で2棟の東西棟建物SB8218A・Bが重複している。ともに2間×5間の建物で，南北にずれており，同規模建物を建替えたものとおもわれる。SB8210の東約5m

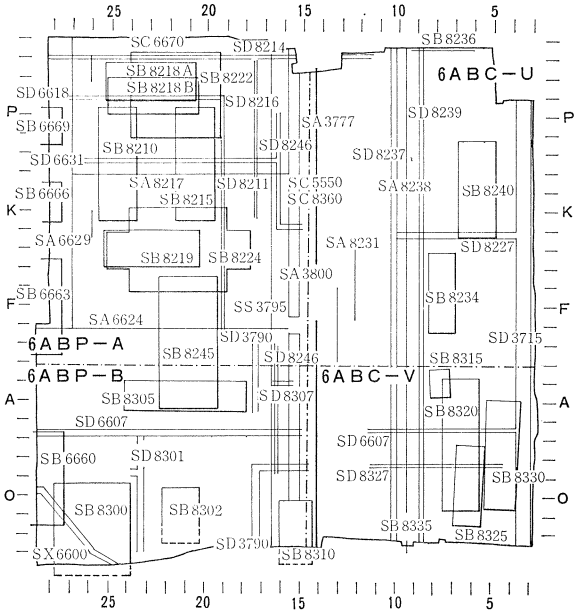

fig. 9　第87次調査地の主要遺構

に，柱筋をそろえる同規模の南北棟建物がある。

7・30　A地区：北辺の東西棟建物SB8222が，南北廂付きの4間×5間の建物であること，その南方の東西棟建物SB8224も同規模建物であることがわかる（ただし，のちにSB8224には妻側にそれぞれ2間の廂がつく）。AD19～AD22以北で南北3間以上，東西3間の総柱建物SB8245を検出する。

8・4　A地区：AH20～AJ20以西で東西棟建物SB8219が2間×5間でまとまり，同位置で重複しているSB8224よりも古いことがわかる。

8・8　A地区：15～16ラインで南北にのびる黄褐色砂礫土を東面築地回廊SC5600の基壇土に想定する。

8・12　U地区：発掘区東辺で南北溝SD3715を発見する。

8・13　U地区：UF05～UH05で土壙SK8235が出現しはじめる。この付近に遺物多し。UJ04・UJ05でSD3715に注ぐ東西溝SD8227を発見。

8・14　U地区：4ライン以西には土壙状の遺構がいくつかあり，凹凸が著しく，木炭や土器片が多く出土する。

8・19　U地区：10ラインに南北溝SD8237があり，さらに発掘区外にのびる。

8・25　U地区：14ラインに南北溝がある。灰色砂層と褐色礫混り土が互層になり，遺物を含んでいないが，ちょうど水田時の地境いにあたるので耕作用の水路跡とおもわれる。

8・26　U地区：14ラインで南北塀を8間分検出する。柱間は15尺で，第27・第41次調査で検出した南北塀SA3777の延長線上にある。

8・27　A地区：16ラインでSC8360の西側柱列を検出。約12尺間隔で根石をとどめるが，AE16・AF16の柱間は15尺と他より広く，その東側約12尺の位置にある柱穴がSC8360の心になるらしい。SD6631はAM16で南におれ，AJ16でさらに東に折れ，凝灰岩切石の暗渠でSC5500をくぐりぬけている。東西塀SA8217および東西塀SA6624が，それぞれ16ラインで終結していることがわかる。

8・28　U地区：UD13～UG13，UE12～UI12でそれぞれ南北塀SA8229・SA8231を検出する。

8・30　現地説明会。

9・1　写真撮影準備。

9・2　写真撮影。

9・3　写真測量準備。

9・4　写真測量。

9・5　補足調査開始。SD3715を掘り下げる。各時期の遺物が混在する。

9・9　A地区：AT23～AT27で北面築地回廊SC6670の南側柱の根石を3間分検出。AT27ではSA6629と重複しており，側柱列のほうが古いことがわかる。U地区：9ラインで南北溝SD8239を発見する。

9・10　U地区：UD07・UD08以北で2間×6間の南北棟小建物SB8234がまとまる。

9・11　U地区：UI04～UI04以北で南北棟建物SB8240が出現しはじめる（のち2間×5間の規模が判明する）。

9・18　U地区：7～11の間，Lライン以北に大土壙を想定しうるが，掘り下げないことにする。

9・19　U地区：9ラインにそって発掘区を南北に貫通する南北塀SA8238は，都合17間分検出したことになる。

9・22　実測開始。

10・1　U地区：北辺で東西柱列SA8236を4間分検出した。

10・2　すべての発掘調査終わる。

L　第87次南発掘調査

6ABC区U・V地区，6ABP区A・B地区
1976年1月6日～3月25日（fig.9）

1・6　発掘調査開始。床土の排土。

1・24　V地区：遺構検出開始。10ラインで南北溝SD8237を検出。

1・26　V地区：9ラインで南北塀SA8238が出現しはじめる。B地区：第69次調査で検出した東西棟建物SB6660の東妻柱を検出。

1・27　V地区：8ラインで南北溝SD8239を発見。B地区：発掘区西北隅で第69次調査で検出した東西棟建物SB6663の南東隅の柱穴を検出。また，Eラインにそう東西塀SA6624を再掘しはじめる。西方からの東西溝SD6607が出現しはじめる。

1・31　B地区：BM23～BM28以北で南北棟両廂付建物SB8300の桁行3間分を検出する。南方は水路によって破壊されている。東廂に接して南北溝SD8301がある。

2・2　B地区：第87次北調査で発見した南北棟総柱建物SB8245がSラインでおわり，7間×3間の規模となる。

2・6　B地区：BO20～BO22以南で南北棟建物SB8302が現われるが，桁行2間分を除く南の部分は破壊されている。

2・7　B地区：BB17以北に南北に帯状にひろがる礫敷面があり，部分的に瓦堆積をとどめる。築地回廊SC5500の雨落溝か。

2・9　B地区：BS18～BB18以西で東西棟建物SB8305がまとまる。2間×7間の規模だが柱穴

は小さい。

2・10　B地区：写真撮影。

2・19　V地区：14ラインで南北塀SA3777を検出するが，VM14では他の柱穴が重複している。UC06以北で土壙SK8316を掘り下げる。この付近には不定形の土壙が多い。

2・20　V地区：SD8239とSD3715との間で，3棟の南北棟建物がまとまる。東側のSB8330がもっとも古く，桁行の2間ごとに間仕切柱をおく。つぎのSB8320は2間×7間の比較的大きな建物で，北から3間目に間仕切柱をおく。

2・21　B地区：16ラインで南北溝を検出するが，これは南北築地SA3800の西雨落溝に比定しうる。その西側に接して築地回廊SC8360の西側柱列の根石が出はじめる。V地区：VM14・VN14以西に東西2間，南北2間以上の柱穴があり，南北築地SA3800に開く門SB8310に想定される。なお，柱穴の重複関係からすれば，築地回廊SC5500，SC8360よりも新しい時期になる。

2・24　B地区：BM17以北で底に礫を敷いた南北溝SD3790が出現する。BP17で東に曲り，築地回廊SC5500の基壇を暗渠SX8311で通りぬける。SC8360の側柱が重複しており，SC5500のほうが古いことがわかる。東西溝SD6607はBR16で玉石積みを終わり，SA3800の基壇を暗渠SX8309でくぐりぬける。

2・26　写真測量の準備をはじめる。

3・4　雨天のため延々になっていた写真測量が終わる。写真撮影開始。

3・6　先日の写真測量は失敗したため，本日再度撮影する。午後，現地説明会。

3・8　補足調査開始。BO28から東にのびる下層の塼積擁壁SX6600を発掘しはじめる。

3・11　BN25以北で東西棟建物SB6660の東階段らしき柱穴があらわれる。塼積擁壁は東へ直進せず，BO28から東南方へ斜めにのびている。

3・22　塼積擁壁が完全に露出したので，クレーンによる写真測量を行なう。

3・24　写真撮影。

3・25　本日ですべての発掘を終り，埋戻しに着手する。

M　第117次発掘調査

6ABD区C地区，6ABQ区A地区

1979年9月17日～1980年1月12日（fig.10）

9・17　表土の排土開始。

10・20　**A**地区西辺から遺構検出開始。黄褐色礫に部分的に灰白色礫を混える整地土の上面で遺構を検出することにする。西辺中央部で第72次調査で一部検出した土壙が出はじめる。

10・23　AE25に東西にのびる2条の石列あり，溝とおもわれる（SD9236）。内には暗褐色粘質土が浅く堆積。AK22に平瓦を敷いたところあり。

10・26　礫敷面を東方に追う。16ラインの築地に近づくにつれて高くなる。

10・29　南北築地SA3800の表土を除く。保存がよく，高いところで遺構面から70～80cm突出している。

10・30　16ライン沿いに南北にのびる築地寄柱痕跡を検出しはじめる（のち東面築地回廊SC5500の足場であることがわかる，SS3795）。AH17で南北溝を検出（のち，SC5500の西雨落溝SD3790となることがわかる）。

11・1　築地北端部の西側に南北溝あり，両岸に瓦と石をならべるところがある（SD8226，のち築地SA3800の雨落溝と判明する）。AO17付近に南北に長い土壙SK9226あり，内に凝灰岩の断片

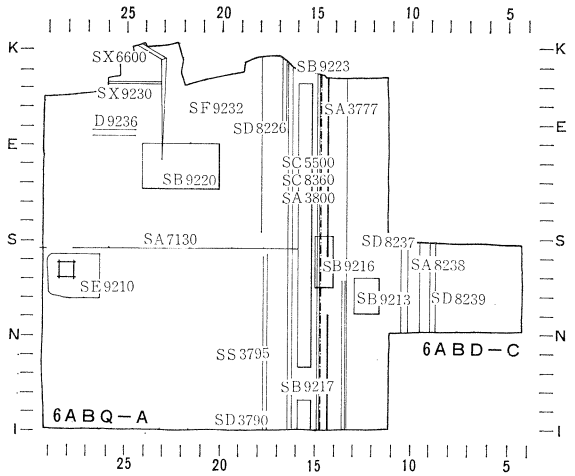

fig. 10　第117次調査地域の主要遺構

がある。

11・5　14ラインで南北塀SA3777の柱穴が出はじめる。その西側に築地回廊SC5500の足場SS3795が２穴１組となって南北にのびる。

11・6　SA3777の柱穴出揃う。ただしAP17付近には柱穴がなく，門になる模様。

11・7　13ライン南部で南北溝SD5575を検出。西岸は地山から掘りこむが，東岸は瓦片をふくむ整地土から掘りこんでいる。足場SS3795の柱穴がSD5575に切りこんでいる。

11・10　C地区のN～S，５～10ラインの間を拡張することにした。

11・12　17ラインで，足場SS3795の柱穴と南北石敷雨落溝SD3790を追跡。SD3790のAB17以北は削平されて消失している。

11・14　SD3790以西の礫敷面を精査する。AA21に方形土壙SK9231があり塼がつまっている。AB20の北西に東西棟の掘立柱建物あり，SB9220は梁間３間で北廂がつく。桁行は現在４間目を検出中。柱抜取痕跡はバラス面からみえ，柱掘形は地山まで下げねばみえない。

11・15　SB9220の桁行が５間で終るのを確認。AD23以北の23ラインに段差があり，試掘の結果その線上に塼積が存することがわかる。つまり第87次調査で検出した塼積擁壁SX6600がこのあたりでは南北方向の斜道となる。

11・16　SB9220の23ライン以西では礫敷の上下層の差異がよくわかる。下層の礫敷は粒揃いの礫で，その上に瓦片をふくむ土層と黄褐色粘質土が堆積し，その上に上層の礫がしかれている。

11・19　AH22～24を拡張することにした。

11・20　AP27の土壙（のち井戸SE9210になる）の輪郭をほぼ掘りあげる。AH22の拡張区では人頭大の石が東西にならぶ，第Ⅱ期の石積擁壁SX9230か。

11・2　AH22の拡張区をさらに北へのばすこととし，構内道路を除去しはじめる。C地区の拡張区では，９ライン以西で南北溝SD8239，南北塀SA8238，南北溝SD8237を検出し，第87次調査で検出した遺構がこのあたりまで及んでいることがわかる。

11・22　AH22でSX6600が南へ折れ曲る部分を発見，地山を削りだしている。その南の整地土からさきに検出したSX9230までは遺構がなく，石積を第Ⅱ期の擁壁としてよいようである。C地区拡張列区をさらに東へのばすことにした。

11・26　C地区拡張区では北東から南西にのびる２条の溝以外に遺構なし，この斜行溝からは新しい磁器が出土し，水田時のものとみられる。

11・29　写真撮影。

11・30　写真撮影。SX6600の南延長部分の塼は抜きとられて，抜取痕跡のみ。

12・1　現地説明会。

12・3　土壙とみていたSE9210は，その外側に方形の掘形をともなっている。

12・7　空中写真測量。遺方実測の準備。

12・10　実測開始。

12・14　実測終了。補足調査開始。

12・19　築地SA3719をN～Sまで，除去することにした。SE9210を下げる。

12・21　SE9210に木材の井戸枠のあることがわかる。SX9230の石列を西に追う。東側はSX6600につきあたることを確認。石敷雨落溝SD3790は上下２層にわかれる。下層溝に切りこむ足場もある。

12・24　SE9210の井戸枠は，断面形が三角形の材を用い，内法東西2.3m，南北2.2mの蒸籠組にする。築地の一部を掘り下げる過程で，寄柱痕跡らしきものがあらわれる。CR10にトレンチを入れ，第27次調査で検出した南北溝SD3765がこの地域におよんでいないことを確かめる。

12・26　写真撮影。補足測量。

1・8　東西溝SD9236が上層礫敷面から掘りこんでいることを確認。AK17でのSD3790は間層をはさんで２層にわかれ，瓦片をふくむ足場の柱穴は下層礫敷面でおおわれいる。

1・10　井戸実測。土層実測。

1・12　井戸枠の取上げ終了。発掘調査終了。